
禁断ノ扉ヲ開ケタトキ

× 神無 ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁断ノ扉ヲ開ケタトキ

【Nコード】

N7410S

【作者名】

×神無×

【あらすじ】

やまさわむぢらかなえまち
山沢村香苗町を治める福岡家を舞台に愛情や友情、憎しみをテーマにした作品。

ジャンルがいまいち分からなくてすみません。

日常の音

平和な日々が一つまた一つと崩れていく・・・
もしかしたらあの時も気づいていたのかも知れない。
これから始まる 惨劇さんげき に・・・

福岡ふくおか 彰吾しょうご

僕はいつもと変わらぬ平凡へいぼんな日々を送っていた。
ふと顔上げると夏の夜空に月と共に星達が光り輝いていた。
しばらく見つめてみると何処からか優しい風が頬をなでていった。
僕の目に映った外の景色は穏やかで綺麗で優しかった。
近くでは野良猫の寂しそうな鳴き声そして、
川の向こう岸の家からこぼれる優しい光が僕達を照らしていた。

今日は部活の練習で帰りが遅くなり、夜道を友達帰る事になったのだ。

部活はテニス部だが部活というものになっているかどうか怪しい、
と言うより部活にはなっていないだろう。今日だって部活といいながらほとんど喋ったりゲームをして遊んでいたり休日にする事とほとんど変わらない。しかも、先生は怒られることもせず一緒に遊んでいなのだ。

この村のテニス部は大会で優勝と言う様な大きな目標はなく他学年との交流を目的として活動している。だからテニスコートもなく練習することも少ないにゆったりとした部活になっている。部員は全員で約五人。あいまいなのは幽霊部員の僕の双子の妹がいるからだ。

名前は未衣菜みいな訳有りで山沢村から離れた学校で小学校四年から高校二年までの七年間を暮らし、今年になって僕と同じ高校に編入して

来た。一応テニス部の部員だが、自分の来たい時に来るといふのんきなもの。他には僕と同じ年の高校三年生の西森悠斗と二年生の忍川雅成そして、一年生の山中真琴と山居日奈子と僕の五人しか居ない。朝からの部活でと言っても遊んでいたただけだがつかれきっていた僕たちはいつもより口数が少なかった。

静かに流れる川の音を聴きながら歩いていると、僕は不意にこうしていられるのもあと何ヶ月なのかと思った。この村では当たり前のことだが、高校に進学といったって高校入試があつたわけでもなく中学の出席日数が足りていれば進学でき、この辺に大学はないし、大学に行こうと思う者も少ない。高校卒業したら就職それが当たり前なのだ。

「彰吾、どうしたのですか？」

日奈子が長い黒髪を揺らしながら不意に話しかけてきた。

「うっん。なんでもないよ。」

僕は首を振り日奈子のほうに顔を向けた。

「彰吾、最近変なのです。」

日奈子は首をかしげた。

「彰吾。失恋か?? 恋煩いか??」

「ちげえーよ。」

僕は首を左右に振りまくる。相変わらず何かあるとすぐ恋煩いか?と聞いてくる雅成は、困つたものだ。風邪を引いても怪我をしても必ず聞いてくる。

「相手は誰? 誰? 誰?」

体を左右に振りながら真琴は聞いてきた。

「だから、いないって!」

ふと悠斗を見ると何かメモ帳にメモしていた。覗き込むと

【彰吾今年に入って二十四回目の恋煩い】

そう書かれていた。だから違つて。僕は悠斗を説得してメモ帳に書いてあつたことを全て消した。いつも笑つて、傷ついたとき、へ

こんでいる時に励ましてくれるこいつらはとても大切な仲間だ。一緒に居て、とても楽しい。でも、こんな日々は永遠には続かないことぐらい僕だつて知っている。来年になれば僕は高校を卒業し、就職する。就職といつても会社で働いたり、物を買ったりと気楽なものではない。僕は祖母の加奈様の下で働きやがて継がなくてはならない。

僕の家はこの山沢村、隣町の香苗町を治めている福岡家で、長男として生まれてきた僕はこの福岡家を継ぎ繁栄させる義務がある。

福岡家で最も権力を持つのは祖母の元当主である加奈様、現当主は正伸様で僕の父でもある。そして次期当主は僕。と言つてもただの取次ぎに過ぎない。

「なんだ、恋煩いじゃないのかよ！」

雅成はつまらなそうに頬を膨らませている。そんな事いつたつて違うものは違う！

「彰吾。困つたときは私に相談するのですよ。」

日奈子はにっこりと笑つた。日奈子は三年前に引つ越してきた。独特の言葉選びと話し方で愛嬌を振りまきこの村に住むお年寄りからも高評価だ！

よく考えると引つ越してきたものが多い。雅成も真琴も悠斗も。雅成は四年前に引つ越してきた。引つ越してきた当時は暗くて無口だった。雅成のお父さんは画家で、雅成も絵が上手だ。あの頃の、雅成は何かに取り付かれていたのではないかと思う位今は明るくて元気だ。真琴は三年前に引つ越してきた。真琴は引つ越してきた当日いきなり学校帰りの僕たちを捕まえて家に招待してくれた。初めて会つたときから元気だなと思つていたけど尽きることないスタミナとパワーで僕らを圧倒する。悠斗は去年引つ越してきた。引つ越してきたからもなかなか学校に馴染めなかったが、部活に入つて一気にみんなと仲良くなった。そして今年は未衣菜が引つ越してきた。雅成が引つ越してきてから毎年一人引つ越してくるのだ。不思議な

ことではあるが深く考えたことはない。引越してきたのはただの偶然だ。

「彰吾！また明日。」

いつの間にか僕たちはかなり歩いてきたようだ。僕は、四人に手を振って角を曲がり歩き出した。僕はまた静かに流れる水の音を聞きながら川岸を歩いていると、遠くのほうで誰かがこちらに手を振っているのが見えた。

僕は暗闇の中でもすぐに誰か分かった。鷹川たかがわ 和樹かずきさんだ。

いつも黒めのジーパンに白のポロシャツ姿で右肩には大きなシヨルダーバックを掛けている。

大きく手を振っている鷹川さんを僕は気づかないふりをして細道に入った。鷹川さんは去年の夏からちよくちよくこの村に来るようになった。

彼自身はここから遠く離れた所にすんでいるがプロの記者を目指しているらしくこの村に観光と言って取材を行っている鷹川が追っている事件は『山沢村殺人事件』（やまさわむらさつじんじけん）この事件は加奈様から聞いている、しかしこの事件はもう四十六年も前の事だ。この事件は福岡家の政治のやり方や定めた事柄に不満を持った人々で結成された『福岡家反対運動組合』（ふくおかけはんたいうんどうくみあい）の組合員が何者かに殺害され右手の人差し指が持ち去られた状態で死体が発見されたという事件で、被害者は五人だった。被害者五人とも福岡家反対運動組合の組合員ということもあって当時の警察は福岡家が犯人じゃないかと疑っていたが、事件から一週間も経たないうちに犯人が自主したのだ。

犯人は三十八歳の無職の男。犯人は犯行の動機について語る前に自殺した。

こうして事件は幕を閉じた。

しかし、鷹川さんは無職の男は犯人ではないといっている。
なぜなら自主した犯人は対人恐怖症であったからだといふのだ。鷹川さんが言うには対人恐怖症の人が五人を呼び出し殺害するというのはおかしい、さらに彼は五人に接点が全くないということから犯人ではない、そして当時の警察と同じように福岡家が犯人ではないかといっているのだ。

鷹川さんはこの事件を特に記事にする目的はなく、ただこの事件の謎めいた所に興味を持っているだけなのだ。四十六年前の解決した事件だから、資料も少なく、わずかな資料も二十三年前の洪水で粉々になってしまった。ただ、この村は少子高齢化が進んでいてお年寄りの数が多いおかげで四十六年前の事件を知っている者が多いのだ。それが鷹川さんの情報収集源だろう。

様々な仮説を立てわざわざ僕に言いに来るのだ。そんなものはただの空想に過ぎない。四十六年も前のことを調べて何が楽しいのか分からない。村の中で聞き込みをしているぐらいなら良かったがついに僕に接触をしてきたのだ。今年の春、部活帰りで友達と別れたとき、ちょうど今ぐらいの時間だ。僕の帰る道を知っていたのか待ち伏せして待っていた。鷹川さんは、福岡家がどれほどの権力を持っているのか知っているのだろうか。もし鷹川さんの仮説が真実だとすればとっくに殺されていてもおかしくない。

僕がそう思うのは過去に福岡家の暗い歴史があるからだ。

福岡家で鉦山いんざんを発掘はっくつした当初大量の毒ガスが吹き出て中止になった場所があった。

そこは、今は閉鎖されコンクリートで地面を固めてあるため毒ガスが漏れることはなくなっているが、その場所に来た、長い底がないように見えるほど深く掘られた穴があり当時、毒ガスによって死亡した人々の遺体ぞくが捨ててあるのだ。福岡家は事故死に見せかけ遺

族に謝罪をし、毒ガスについては一切語らなかったそうだ。事故死にした理由は聞いていないがあの穴の底にはおびただしい数の白骨化した人間の骨が落ちていたのだ。そのため、遺族の元に遺骨がわたる事はなかった。

この事から、僕が考えるのは福岡家がその気になれば遠くから山沢村に来ていた鷹川さんを殺害してあの穴に放り込んでしまえば行方不明ということになるだけということなのだ。

僕はそんなことを考えながら足早に歩いた。訳の分からない妄想に付き合うのも体力がいるさらに部活で疲れて果てている僕は避けて歩くのは当然といえば当然だ。

遠くで僕の名前を呼んでいる。

僕は足早に家に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7410s/>

禁断ノ扉ヲ開ケタトキ

2011年10月9日00時56分発行